優秀賞　中学生部門〈家族の死〉

# 受け継いだ想い

桐生市立中央中学校 3年
井田　菜々美

一人っ子だった私の唯一頼りにできる存在おじいちゃんが死んだのは去年の夏、私の誕生日の一週間前でした。

私が病院にかけつけたときにはもう、帰らぬ人となっていました。前の日の夜、呼吸が困難になり、緊急入院したおじいちゃんはもうほとんど話せない状態で、私は最後にお礼の手紙を書き、病院を後にしたのです。

次の日、あっけなくおわりを迎えたおじいちゃん。何を考え、何を想い、この世を去ったのか全く誰もわからないまま、一週間がたった頃、私の誕生日にある一通の手紙が届きました。何とそれは、亡くなる前日におじいちゃんが私の誕生日に届くよう、注文したもので、中に入っていたカードにはこう書いてあったのです。「お誕生日おめでとう。君の笑顔が大好きだよ。これからも君の笑顔でたくさんの人を幸せにしてね。ずっと見守っているよ」それはまるで天国からのメッセージのようでした。おじいちゃんは自分の命が、もう長くないことをわかっていたのかもしれません。私はこの時思いました。おじいちゃんのこの想いを、むだにしてはいけないと。何があってもおじいちゃんのためにたくさんの人を私の笑顔で幸せにしてみせると。

そう決意した日から一年がたちましたがあの日決めたことは今でも忘れていません。ただ笑顔でいられないぐらいつらいことが、たくさんあり、どうすればいいのかわからなくなった時、ふとおじいちゃんのパソコンをあけてみたら、そこにはおじいちゃんが生きている時に残したと見られる言葉が、うちこんであったのです。「一、誰も一人では生きてゆけない。仲間がいるから、君は笑うことができる。その感謝を忘れずに、今日という日を大切にして生きてゆきなさい。二、生きている限り、困難にぶつかることがたくさんあるだろう。でもそんな時、無理して笑わずに思いっきり泣いてもいいんだ。今日泣いた分だけ明日笑えばいい。どんな経験も全てに意味があるんだ。幸せは、すぐ近くにあるよ」この言葉を読みおわった時、ふと私の大切な人の顔が頭にうかびました。そして、おじいちゃんからもらったこの命を、想いを受け継ぎ、未来へ向けてつないでいこうと思ったのです。そのためには何としても最後まで生き抜いて、私の子孫にこの想いを伝えなくてはいけない使命を感じました。

生きていること以上に幸せなことなんてあるのでしょうか。大切な人がいて、その人と笑い合えることが、どれほどすばらしいことか忘れてしまわないように、おじいちゃんから受け継いだ想いを胸にしまって、泣いたり笑ったりの人生を私らしく生き抜き、いつかこの命が終わるまで、全力で笑っていよう。この私の気持ちが、少しでも多くの人に届くことを願っています。